

れば省くべきよし、餘材抄にもいへり、焦は韻鏡二十六轉宵韻の字なり、セヲの如く聞ゆる故に、轉じてかくいへるか、襖子をアヲシといふも同じ、そも韻に用るはアイウエオ等なれば、セオと書べけれども、拗音のヲをかけるは、直音の字なれども、御國の音より見れば、なほ拗音なる故に、御國の拗音の韻を用しにや、御國の音韻は、紀伊キイ、基肄キイ、都宇斗トウ於オ、贈オ、弟セ、翳セ、穎エ、娃エなど、は韻けれども、セオとは韻かず、焦は子姚切にてシエウの約まる音ゆゑに、拗音にておのづからセヲの如く聞ゆるなり、紀長谷雄卿の書給へる、大藏太夫の七十壽序にも、自のを發昭と書給へり、この昭字も同じ宵韻の字にてセヲなり、

〔茅窓漫錄下〕庭忌草

芭蕉を庭忌草と名付くるは、桔梗をきちかふといふとおなじく、字音にては、歌によみにくきによりて名付たるにや、庭忌といふは、佛書に此身如芭蕉と云ふ、其葉脆く風に破れやすき故に、庭に植うる事を忌むとみえたり、西國にては神社佛閣より外は植ゑず、然るに此草に花咲く時は、優曇華の咲きたるとて、大に貴ぶも亦をかし、

〔大和本草七〕芭蕉 潛確類書曰、懷素治芭蕉、取葉代紙而書、三體詩註、古人多喜書芭蕉葉、如懷素種芭蕉供書是也、本草濕草ニ載ス、軟地ニウヘテ繁ヤズシ、年々子生ズ、草中最大者也、暮春生葉至秋而止、其新卷方ニ舒レバ新葉又生、冬ニ至テ根及莖不枯、年々發生、歷久而大開、黃花極稀、

〔和漢三才圖會九十四本〕芭蕉 甘蔗 芭苴 天苴 和名發勢乎波略○中

按芭蕉薩摩多有之、畿内寺院希有之、人家忌之不植、凡經三歲者剝皮、織布、絢繩、自琉球多出芭蕉布、光白色、美於練絹、而弱於麻布、其子呼名比牟奢吾、今俗陰囊腫者用芭蕉葉裹之、亦有據矣、鎌倉淨密法師庵優曇花開、遠近群集、二位禪尼使左近將監見之、曰芭蕉花也、蓋芭蕉以花開希有人以爲優曇花也、按優曇花者、乃是無花果之名也、